The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期シカゴ学派モノグラフ クリフォード・ショウ『ジャック・ローラー』の生活史法
Author(s)	玉井, 眞理子
Citation	大阪大学教育学年報. 1998, 3, p. 91-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第3号（1998年）
Annals of Educational Studies Vol.3

初期シカゴ学派モノグラフ
クリフォード・ショウ『ジャック・ローラー』(注1)の生活史法

玉 井 眞 理 子

【要旨】
本論文の目的は、初期シカゴ学派モノグラフの一つ『ジャック・ローラー』の生活史法を再評価することである。これまでこのモノグラフは生活史を入手する手法や、他の多くの資料を用いて生活史を実証している点が評価されてきた。だがここで特に注目する方法論上の特徴は、調査者クリフォード・ショウと調査対象者スタンレー少年が矯正者（更生させる者）と矯正対象者（更生される者）の関係にあり、研究の過程で矯正計画が試みられ、その結果現実に少年が更生することによって、非行要因に関するショウの仮説が検証されていることである。この仮説検証は、(1)他の様々な資料によって非行要因の仮説が提示され、(2)非行少年の生活史によって仮説が裏付けられ、(3)仮説に基づいた矯正計画を実施し、非行少年が更生してゆく経緯がその生活史で示される、の三部構成で展開されている。これは「単に記述的であるだけで、なぜかという疑問に答えていない」という、質的調査になされてきた従来の批判を越えるものであり、生活史法の新たな可能性を開拓したとして評価される。

・はじめに

初期シカゴ学派とは、シカゴ学派の中でも大学創設から1930年代中頃までの、第一、第二、第三世代を指す(注2)。この学派は社会学的研究の一般的潮流を方向付け、社会学の専門雑誌を発行し、優れた教科書や数多くのモノグラフを発表したことで知られる。しかし1930年代中頃になると、アメリカにおけるこの学派の勢力は急速に衰え、機能主義が社会学の首座につき、シカゴ学派の終焉が言われた。

だが近年シカゴ学派の再評価の試みが著しく、シカゴ学派関連の研究書、研究論文、翻訳書の出版が目立っている。

この初期シカゴ学派の再興は、当時と現在との時代の共通性を反映していると考えられる。その共通性とは、それまで全てを網羅すると信じられていたグランドセオリーの限界が厳しく自覚されていることである。近年の社会学においては、機能主義社会学がその首座を明け渡し、ミニ・パラダイム乱立の状態が永らく続いている。マーカスとフィッシャーによれば、このような状況に最も類似した時代が1920年代から30年代である。彼らは2つの時代の共通点として、一般的かつ歴史的な包括理論を構築する試みに混乱が生じ、また以前の「基本」概念が、もはやかつてのようにうまく作動しなくなったことを指摘している。社会科学やその他の知識人は、既存の枠組みで現実世界をとらえきれなくなったことに気づき、関心が次第に細部へと移行したのである（Marcus & Fischer1986,永渕訳pp28-43）。初期シカゴ学派を代表する社会学者のトマスとズナニエツキは当時次のように主張している。「人間は自分の個人的或いは社会的過去に関係なく、同一の影響下では同一の方法で反応する」という「古い仮説が間違っていると分かっているにも

かかわらず、何ら新しい作業理念がそれらに取って替わっていない」(Thomas&Znaniecki1918-20,桜井訳p13)。

グランドセオリーの限界が自覚されるとき、現実の事象に目を向ける必要が生じてくる。そこで重要となるのは民族誌的な方法である。初期シカゴ学派はこの方法を重視し、とりわけその第二世代にあたるパーク、バージェスの指導のもとには民族誌的方法を採用した、今日名を残すモノグラフが数多く輩出された。

そのなかでも『ジャック・ローラー』は特に生活史法の分野で注目され、生活史研究の古典的位置を占めている。イーストホープは「ショウの生活史研究ほど、生活史法を一つの社会学的方法として著名にしたものはなかった」(Easthope1974、川合他訳p108) と評した。グランドセオリーの限界が厳しく自覚され、研究者がフィールドに出て生の現実を記述することが望まれる現在、その方法を批判的に再検討することには今日的意義があると思われる。そこで本論文では『ジャック・ローラー』を取り上げ、特にその方法に注目した分析を以下の構成で行う。まず初期シカゴ学派の特徴を概観し、次に『ジャック・ローラー』の方法上の特徴をまとめ、最後にその方法の利点及び疑問点について考察する。

第一章　ショウと初期シカゴ学派

『ジャック・ローラー』の方法論を具体的に論ずる前に、それが生み出される基盤となった初期シカゴ学派について述べる必要があると思われる。そこでこの章では、『ジャック・ローラー』の方法論と関係する限りにおいての、初期シカゴ学派の様相をとらえておく。

第一節　ショウ入学当時のシカゴ大学及びシカゴについて

『ジャック・ローラー』の著者クリフォード・ショウが1919年にシカゴ大学大学院社会学科に入学した時、後にビッグフォーと呼ばれる初期シカゴ学派第一世代の姿はそこになく、トマスもショウ入学の前年に大学を去っていた。しかしトマスらの社会学上の立場や実証的方法は、第二世代を代表するパーク、バージェス、そしてその教え子たちに継承された。例えばトマスらは「勝手な限定付けと主観的解釈を避けるための方法」として次の2つ、1.具体的な社会を、その文化生活を構成している問題や状況の全ての複合体からなる全体性として、モノグラフ的に研究すること、2.この社会で受け入れられている条件下で体現されている個別の形態と関連づけてそれぞれの社会集団の問題を研究し、具体的な文化現象が一定の文化的環境内で表わしている複雑な意味を考察すること (Thomas&Znaniecki1918-20,桜井訳p19) を挙げたが、これらはショウら第三世代の研究上の基本的態度をあらわしていると言える。

パーク・バージェスの教え子たちは、フィールドで情報を収集することが推奨された。パークが次のように言って、学生たちにフィールドワークを促したことはよく知られている。「要するに、君たち、実際に街へ出かけていって君たちのズボンを『本物の』調査で汚してきなさい」(Bulmer1984,p97)。またバージェスが教えていたコースの大学院生は、授業で取り上げられた社会問題に関連する社会活動に従事することになっていた (Rice1931,p550)。

このようにフィールドワークが推奨されたシカゴという都市は、研究テーマとするにふさわしい様々な題材を提供していた。当時シカゴは産業の中心地としてアメリカ第二の都市へと急成長するに伴い、特にその主要産業であった精肉産業と製鋼業が労働力人口をひきつけた。新たに必要となる労働力を担ったのは、ヨーロッパの農村からの移民である。20世紀初等のアメリカは、ヨーロッパ農村部から年間百万人以上の移民を受け入れていたが、そうした移民のほとんどが都市スラムに集住した。シカゴの中心部にもそうしたスラムが形成され、貧困や病気や非行・犯罪の多発がスラムの特性となっていた（Faris1967、奥田・広田訳pp45-46,90-92を参照）。

第二節　ショウの研究活動とバージェスの影響

ショウの研究活動にはバージェスの影響が強くあらわれている。ベネットは、パークと比較した場合のバージェスの特徴として以下の2つを指摘する（Bennett1981,pp154-157）。1.パークが生活史をそれほど重要視しなかったのに対し、バージェスはこれに関心を持つ。それは社会学を現実に位置づけ直すというトマスの研究上の態度を継承したことに加え、社会改良を実践するためには社会学者以外の読者をも獲得するために生活史を活用しようとした。2.トマス、パークが社会学と社会改良が直接的に結びついていた状況から両者を引き離したのに対し、バージェスは社会改良活動に積極的に参加した(注3)。これらのことからショウが生活史研究を重視し、社会改良活動を指導したのは、バージェスの影響であることが推察される。このほかにもショウが少年非行に関心を持ったのはバージェスの影響であることや（Rice1931,p550）、バージェスがショウに生活史資料の信頼性、妥当性、代表性を確保するための様々な忠告を与えた（Bulmer1984,p184）ことが指摘されている。

ではバージェスに影響を受けたショウの研究活動はいかなるものであったのか。ショウは入学当初より非行に関心を持ち、シカゴ大学に在学しながら、イリノイ州聖チャールズ教護院で臨時のパロールオフィサー（1921-23）、そしてクック郡裁判所で臨時のプロベーションオフィサー（1924-26）に従事した（Snodgrass1972,pp131-132）。このとき非行少年やその家族との接触の機会が与えられ、その経験から社会学的仮説を得た（Rice1931,pp549-550）。1926年に青少年調査研究所の新社会学研究部部長に就任し、1927年からは後輩マッケイと共同で研究する。そして1930年代初めには、非行多発地帯の環境改善及び非行少年に対する直接的な働きかけによって、非行問題を解決しようとした社会改良活動、ＣＡＰ(Chicago Area Project)を発足させた。

ショウは以上のように少年非行の現実の事象と向き合いながら、主として2つの手法を用いた非行研究を発表している。手法の一つは生活史の収集、もう一つは非行の地理的分布の統計的論証である。前者を代表するものとしてはいわゆる生活史研究三部作、すなわち本論文で取り上げる『ジャック・ローラー』（1930）、ピストル強盗とレイプの罪で逮捕され、「軽愚」と報じられた少年を扱う『非行歴の自然史』（1931）、移民家族の5人の兄弟の事例から犯罪と文化葛藤との関係をとらえた『非行兄弟たち』（1942）がある。また後者を代表するものとしては『非行地域』（1929）、『少年非行の社会的要因』（1931）、『少年非行と都市地域』（1942）が挙げられる。先の生活史三部作では、生活史法が単独に用いられるのではなく、統計的資料が生活史を補完するものとして利用されている。また『ジャック・ローラー』に先行する二論文、『事例研究の方法』(1926)や『非行と社会環境』（1929）を見ても、ショウが当初より複数の手法を用いて非行を多角

的にとらえようとしていたことがわかる。

第三節　初期シカゴ学派「黄金時代」の代表的モノグラフの傾向

初期シカゴ学派は特にその「黄金時代」(1920-1930半ば) に、<生のデータ>を用いたモノグラフを数多く産出した。このことは社会学者の関心を集めてきたが、パークらがフィールドワークを推奨していたこともあり、これまで初期シカゴ学派は「参与観察のパイオニアである」とか「量的調査を忌避した」と言われていた。

しかし近年、これまでのシカゴ学派についての言説が神話にすぎないとの議論がなされている。例えばハーベイは、シカゴ学派が「エスノグラフィックな調査の発祥地 (=home) というのは神話」(Harvey1987,p74) であるとし、1920年代のシカゴ学派の「黄金時代」でさえ、参与観察が栄えた時代ではない (Harvey1987,p56) と言う。彼の参与観察の基準はかなり厳しく、「調査者がある参与した役割を通して直接的に観察することであり、そうすることで研究対象集団の組織化のプロセスやシンボリックなプロセスを細部にわたって徹底的に調べることを可能にすること」(Harvey1987,p58) としており、スラッシャーの『ギャング』もレックレスの『シカゴの悪徳』もこの基準を満たしていないと言う。またハーベイは、1915年から1950年の間にシカゴ大学大学院社会学科に提出された博士論文からランダムに選んだ42編の論文を詳細に検討し、全体の3分の2は参与観察を調査法として全く使っていないことを明らかにした (Harvey1987,p56)。

シカゴ学派の言説に対する批判は他にもなされており、参与観察の起源が初期シカゴ学派にあるわけではないこと(Platt1994,pp58-59)や、初期シカゴ学派では量的調査も質的調査と同様に重要視されていたこと (Bulmer1981,1984.Harvey1987,p74) などが指摘されている。

ハーベイ、バルマーらの脱神話化の主張を踏まえ、中野 (1997) は『ジャック・ローラー』を含めた計六つの代表的モノグラフのそれぞれの方法を検討し、それらに共通する特徴をまとめた。その特徴とは、公的ドキュメントの探索、インフォーマルおよびフォーマルインタビュー、参与観察、生活史など個人的ドキュメントの利用など、多角的な調査が行われていること、また質的調査ばかりでなく量的方法を組み合わせていることである。それらは確かに『ジャック・ローラー』の方法の特徴を概括しているが、その本質をとらえるにはより詳細な検討が必要である。その詳細については次章で論じる。

第二章　『ジャック・ローラー』における生活史法の特徴

『ジャック・ローラー』は非行少年スタンレー (仮名) のモノグラフである。この章では『ジャック・ローラー』の生活史法の特徴を、特に次の4点に注目してまとめる。第一は調査者と調査対象者の関係、第二は生活史の収集法、第三は生活史の提示の仕方、第四は生活史収集の矯正的側面である。

尚、以下ではショウに従ってown storyという用語 (注4) を使うが、これは非行少年の経験についての少年自身の説明であり、一人称形式の、少年自身の言葉のままに書かれた物語を意味する。

第一節　調査者と調査対象者の関係

最初にこの点に注目するのは、調査者と調査対象者の関係こそが生活史法を特徴づけると思われるからである。

『ジャック・ローラー』で特徴的なのは、調査者がフィールドに矯正者の役割を持ち込み、調査者が調査において実質上調査対象者の更生に直接携わるという、矯正者―被矯正者の関係にあることである。しかし残念ながら、『ジャック・ローラー』では両者の関係について断片的にしか書かれていない。そこで両者の関係を知る手がかりとして、『ジャック・ローラー』に関するスノドグラスやベネットの研究（Snodgrass1972/1983, Bennett1981）を参照して調査の経緯を見ておく。

ショウがスタンレー少年に最初に接触したのは、イリノイ州聖チャールズ教護院で臨時のパロールオフィサーに従事していた1923年頃である(注5)。その仕事は、仮釈放前の少年を調査し、家庭訪問し、釈放期間中の少年の仕事を探すことであった（Bennett1981,p166）。ショウはすでに1921年頃から非行少年たちのown story収集を始めていた（Bennett1981,p277）が、スタンレーに最初のインタビュー調査（これを第一次調査と呼んでおく）を行なったのは、スタンレーが16歳8カ月（Shaw1930,p23）の1924年であった。この第一次調査までに、スタンレーは6歳の時から家出・放浪で23回、万引き・窃盗で5回、ジャック・ローリングと押し込み強盗で2回逮捕され、様々な施設に収容されていた。この第一次調査でスタンレーは「僕はなぜ、いかに犯罪者になったか」と題する、最初の短いown storyを書いた。しかしこの調査はスタンレーがシカゴ矯正施設に収容されたため、約一年間中断された。矯正施設から釈放されたスタンレーは、ショウを頼って彼のもとを訪ねる。この時ショウの依頼を受け、より詳しいown storyの執筆を開始した（これを第二次調査と呼んでおく）。この時ショウはクック郡裁判所で臨時のプロベーションオフィサー（1924-26）や青少年調査研究所（1926-）の部長の役目を果たす一方、スタンレーの更生を支え、次節で見るような彼独自の方法を用いてスタンレーにown storyを書かせた。第一次調査から数えると、彼のown story完成まで約6年要したことになる。

シカゴ学派黄金時代のモノグラフの一つとされる『タクシー・ダンスホール』を著したクレッシーは、社会調査における調査者と調査対象者との関係についてまとめた論文で、調査対象者に対する調査者ショウの立場を「威信あるストレンジャー」に分類する（Cressey1927頃→1983,p106）。また彼はかつてショウが自ら、社会学者を医者に例えて話していたことを報告している（Bulmer1984,p102）。この場合調査者は、調査対象とする集団の何らかのカテゴリーに属しており、集団の生活のパターンに適合した地位を共有している。調査者はその集団の一員ではあるものの、威信ある地位という点で他の人々と区別される。

第二節　生活史の収集法

前節で示した調査者の立場は、調査者主導の収集法を可能にしている。

own storyを収集するにあたってショウが重視したのは、1.物語ができるだけ調査対象者が使ったそのままの言葉で書かれていること、そして2.いつもその物語は非行少年の人生の出来事の自然な連続性に沿っていることである。その理由は次の通りである。1については、調査対象者の物語を調査者の言語に翻訳すると、もとの意味を著しく変えてしまうからであり、また2につい

ては、own storyから非行少年の過去の出来事の連続性を知ろうとするためである。

非行少年のown storyが以上2つの条件を満たすため、ショウは独自の生活記録収集法を採用した。それは次の3つの段階を踏まえる。1）生活史のインタビュー調査において非行少年が語ったことを速記者に記録させ、2）その記録から、時間軸に沿った少年の問題行動・非行・逮捕・出廷・拘留リストを作成し、3）リストを指針にして少年自身の生活史を書かせる。

だがこの過程は一巡すれば終わるというものではなかった。その記録が乏しい場合には、より詳しく記述するようにショウはスタンレーを促すのだった。物語がより完全なものとなるまで、この詳しく書かせる努力が続けられた。ゆえにこうして書かれたown storyはいわゆる「自伝」とは異なり、その執筆過程で常に矛盾がないかどうかをリストに照らして調査者に確認され、その詳しさや、何について書くかも、調査者の要求に応じる必要があったのである。

第三節　生活史の提示法

『ジャック・ローラー』におけるown storyの提示法の特徴について述べる前に、あらかじめその全体の構成を見ておく。序文と議論を除く本論全十三章は、その内容から判断すると、A第一章から第三章まで、B第四章から第十二章まで、C第十三章、の三部構成と見なして差し支えないであろう。Aはショウによる記述、Bは非行のプロセスに関するスタンレーのown story（5歳から17歳まで）、そしてCはショウの記述及び、更生のプロセスに関するスタンレーのown story（17歳から22歳近くまで）である。

『ジャック・ローラー』のown storyの提示法の第一の特徴として、以下の2点が指摘できる。Aという、スタンレーのown storyの前段階で、他の様々な資料を用いてスタンレーのown storyの一定の信頼性を確認している点と、また同時にそのown storyの一定の代表性を示している点である。

ショウはown storyだけでは、その診断・治療（＝矯正）上の価値や理論的価値が大幅に減少するし、いかなる解釈も疑わしさが残るとする。そこで利用されるのは次の資料である。1 他の少年たちのown story、2 妹がスタンレー少年に宛てた手紙、3 彼が暮らした3つの地域の犯罪発生率、移民の住民が占める割合など、4 シカゴにおける非行少年、成人犯罪者の居住地を記したスポットマップ、5 家族背景、6 スタンレー少年の逮捕・拘留記録、7 職歴、8 ヒーリー博士や保護監察官の記禄、9 裁判所の記録。

それらの資料がいかに利用されているかを一部紹介するなら、聖チャールズ教護院に収容されていたスタンレー（スタンレー8歳の時）に宛てた妹の手紙や、ヒーリー博士のスタンレーに関する記録（スタンレー7歳10カ月及び8歳の時）、そして保護監察官の記録は、スタンレーがown storyで記している彼の崩壊家庭の状況に関して、断片的であれ、その信頼性を保証している。また彼が非行少年であった頃に暮らしていた2つの地区と、ショウが彼を更生させるために住まわせた地区の概況が、犯罪発生率や犯罪者の居住地の集中度という非行研究の視点から統計的・空間的に把握されているが、それらの資料は、スタンレーの置かれた状況が彼に固有の特異な状況ではなく、シカゴの非行多発地帯で暮らす少年たちに大なり小なり共通していることを暗示している。更に他の少年たちのown storyの事例には、スタンレーと共通した現実—例えば非行を誘発させる崩壊家庭の状況や、他の非行少年達から逸脱文化が伝承される（地域や施設での）状況—が記されていることから、スタンレーのown storyの一定の信頼性、代表性が示される。

own storyの提示法の特徴の第二は、Aで仮説を提示し、Bで仮説が裏付けられ、Cで仮説を実証するという形をとっていることである。

Aで示される理論的仮説をまとめれば以下の表のようになる。ショウにとっては非行は治療可能な社会病理である。このとき前提となっているのは、文化により規定される「白紙的人間」である。非行の原因は都市化において地域社会の道徳基準が混乱し、地域や親の統制力が著しく低下する一方、少年たちは彼らが準拠する下位非行文化に同調するからとされる。

表　ショウの仮説

非行	社会病理
人間観	文化により規定される「白紙的人間」 人間の「可塑性」についての信念。
非行の原因	社会解体 少年が準拠する下位文化に同調するため

Bのown storyに主として記されるのは、アメリカの中流文化とは異なる、非行を容認し、鼓舞する当時のシカゴの移民下位文化固有の生活態度や価値基準である。例えば継母は少年の非行の抑止力となるどころか、貧しさのためにむしろ積極的に彼に盗みをさせていた。また非行集団のなかでは非行はスリルを楽しむ遊びの一つであり、より困難で度胸を必要とする犯罪をやり遂げた者ほど尊敬された。スタンレーはそうした下位文化に同調する過程で、家出少年から「ジャック・ローラー」へとなっていった。彼に非行を促す家族や地域、非行集団の強い影響力に対して、施設の形式的対応は少年の更生に何ら効力を発揮しないばかりでなく、他の非行少年との接触の機会を与え、かえって犯罪者としての自覚を高める「意図せざる結果」をもたらすのだった。このようにスタンレーの描写は、非行の社会的・文化的要因を強調するショウの理論的仮説を裏付ける。

そしてCにおいては、ショウはスタンレーの生育地域の犯罪統計や彼のown storyから、非行の原因がコミュニティの心性や環境、及び家族の態度や道徳規範、そして彼のパーソナリティにあると判断し、非行要因を取り除く治療計画の実験的試みを行なう。それは主として、外的環境を変え内面的なサポートを与えるというものであった。ショウはスタンレーをそれまでとは全く異なる、犯罪発生率の低い地域に移住させ、彼のパーソナリティに照らし、彼が打ち解けた関係を持つことのできそうな家族を選んでそこの里子とし、移住した地域の非逸脱的青年集団との接触を促した。また週に一度はショウがスタンレーに会い、彼が新しい文化に適応するための助言を与えた。この理論的仮説に基づく実験の結果、スタンレーは幾度かの転職の後、セールスの仕事に落ち着き、結婚して子どもをもうけ、子どもの幸せを願う父親となる。ショウの治療計画の間罪を犯すこともなかった。このように現実にスタンレーが更生したことにより、ショウの理論的仮説の正しさが証明されるのである。

第四節　矯正実践としての生活史法

研究過程で移住させるなどの治療計画の試みがなされていたことは既に示したが、ここで注目

するのは、ショウがスタンレーにその生活史を語らせたり書かせたことそのものが、矯正実践の営為となっていた点である。生活史を書かせたり、語らせたりすることが治療的側面を含んでいたことは、バージェス（Burgess1930,P195）とベネットが（Bennett1981,p188）、またショウがスタンレーに習慣的に接触していたことが彼の更生において重要であったことについてはスノドグラス（Snodgrass1983,p455）が指摘している。

スタンレーの更生を理解する上で有用なのは、バーガー＆ルックマンのいう＜オルターネーション＞(注6)の概念（Barger1963,pp53-65,Barger & Luckmann1966,pp144-148）である。＜オルターネーション＞とは、新しい意味秩序を生き直すこと、つまり再社会化の達成である。スタンレーはかつて、犯罪に罪悪感を持たず、将来は犯罪社会の大物となることを夢見る非行少年であったが、ショウの治療計画の実践の後、セールスの仕事に働きがいを得、妻と子どもを自分にとっての全てと考える、まっとうなアメリカ市民へと自己変容を果たした。

バーガー＆ルックマンによれば、＜オルターネーション＞にとって最も重要であるのは、考え方の変化の全過程を正当化してくれる装置の存在である。＜オルターネーション＞の際、過去の生活史は新しい現実の正当化装置のなかで、根底から解釈し直されなければならない。その場合に「新しい意味ある他者」が必要となる。なぜなら主観的現実が変えられるのは、この新しい意味ある他者との会話においてであるからだ（Barger & Luckmann1966,p146）。

「新しい意味ある他者」の役割を担うにふさわしい矯正者ショウに対し、その方向付けに従って生活史を語らせたり書かせたことこそ、スタンレーが更生する上で重要であった。それはすなわち、スタンレーが過去に準拠していた非行下位文化の価値基準を、アメリカ中流文化の準拠枠から批判的にとらえ直させ、意味世界を再構築させることである。つまり調査それ自体が、「考え方の変化の全過程を正当化してくれる装置」だったと考えることができる。

第三章　『ジャック・ローラー』における生活史法の効果及び疑問点

第一節　生活史法の効果

生活史法の個々の手法の利点について既に述べたものもあるが、ここではその生活史法の総合的な効果について二点を指摘する。そしてその効果のあらわれを知る一つの手がかりとして、『ジャック・ローラー』の読み方を幾つか例示する。

『ジャック・ローラー』の生活史法の総合的効果については、第一にスタンレーの経験についての記述が、非行研究や矯正実践にとって重要となる範囲で、しかも整理されて得られていることが挙げられる。スタンレーのown storyで明らかにされるのは、スタンレーが人生のその時々にいかに状況を定義したのか、そして特に第一次集団との関わりにおいて、いかに彼が社会と相互作用し、その相互作用の経験がいかに積み重ねられ、どのように犯罪行為に結びついていったかについての詳しい描写である。これはショウが矯正者の特権的立場から、根気強い厳密な収集法を用いて情報が取捨選択され、さらに時間の流れに沿って線形的に配列されることにより可能となっている。

効果の第二は、非行原因の仮説論証に説得力を持たせていることである。これはスタンレーの

own storyだけに頼らず、まず他の様々な資料から非行原因をとらえ、次にスタンレーの視座からのリアリティに富んだ証言としてのown storyが示されるばかりでなく、最後に矯正実験を試み、それが成功するまでの経過がスタンレーの視座から詳細に提示されることによって可能となっている。

では『ジャック・ローラー』における生活史法が以上の効果をあげていることにより、このモノグラフはいかなる影響力を持ちうるのであろうか。その可能性として、例えば以下の３つが挙げられる。

第一は資料としての影響力である。実際にこれを資料とした研究に、宝月の「逸脱者のキャリア分析―『ジャック・ローラー』の解釈の試み」（1990）がある。これは社会的相互作用論の観点からスタンレーの生活史を分析した論文であるが、『ジャック・ローラー』が出版されて60年経過したにもかかわらず、日本の代表的な逸脱論研究者によって分析の対象とされ、非行少年の逸脱化の過程が詳細に示されたことは、時代や国の違いを超えてもなお、『ジャック・ローラー』のその資料としての価値が損なわれぬことを証明している。

第二は当時のフォーマルな矯正法を批判する影響力である。『ジャック・ローラー』は、「少年自身が書いた生活史で明らかになる個人的態度や交友関係に関する予備知識」を用いた矯正法の一つの成功事例である。実際にその「矯正の処方箋」（非行＝病理のアナロジーで言うなら）がどれほどの影響力を持ち得たかをここで示す事はできないけれども、ショウはかなり意識的に当時の形式的処遇を批判している。彼は非行少年に対する処遇が「多くの場合失敗している」と言う。その理由はワーカーがあまりに多くのケースを抱えるため、個人的・内面的な側面を扱えないからだとする。その結果、ワーカーの非行少年に対する処遇はフォーマルで、「逮捕の脅しや処罰を通した統制や矯正」を行なうが、そうした処遇が無駄であることはスタンレーのown storyを見れば明らかとなる。

第三は、偏見を正し、シカゴ地区計画（Chicago Area Project=CAP）を推進させた啓蒙書としての影響力である。19世紀には人種改良運動が生物学者のみならず多くの社会学者や一般市民の間に浸透し、スラム地区の貧困、病気、犯罪の頻出は居住者の遺伝的性格に起因すると考えられていた（Faris1967,奥田・広田訳p92）。だが『ジャック・ローラー』を読めば、社会・文化的要因こそ重要であることがわかる。特に家族や近隣地域など第一次集団の崩壊による、子どもの社会化機能欠如の問題に注目すれば、地域を変革することによって非行を予防したり矯正するのが不可能でないことを読者に納得させる。実際ショウは『ジャック・ローラー』出版後まもなく、非行予防と非行少年の地域内処遇をめざしたCAPを、複数の非行多発地域で指導し、実践的政策に多大な影響を与えたが、そのためには非行が先天性要因によるとする、アメリカ中流階層の人々、特に地域住民に浸透した考えをあらかじめ否定しておくる必要があった。ベネットはショウの発表した生活史が、その読者をCAP支持者にするのに役立ったとしている（Bennett1981,p200）。

第二節　疑問点

ショウとスタンレーとの関係は、調査アプローチの強みと弱みの両方を合わせ持っている。その不均衡な権力関係に注目した場合、以下の２つの疑問が残る。第一は果たして調査対象者の主体性・自発性が確保されたのかという疑問、第二は倫理上の疑問である。

1 調査対象者の主体性・自発性の確保に関する疑問

調査者の統制が強く作用する生活史収集法を採用したことにより、ショウはスタンレーのown storyの産出に、量・質共に積極的に加担している。量的側面に注目した場合、バルマーによると、第一次調査で書いたown storyと第二次調査で完成されたown storyの語数は、約3,000語から約50,000語に増加している（Bulmer1984,p107）。また質的側面に注目すれば、スタンレーのown storyは、ショウが句読点以外には修正せず（Shaw1930,p47）とも出版できるほどの完成度を示していた。ショウは「調査者の方向付けと統制を最小限に止められ」たというが果たしてそう言えるだろうか。バルマーは「字義通りの『少年自身の物語』とは言えない」と批判する（Bulmer1984,p107）。

インタビュー調査には、一般的に、後の生活史研究者が「研究者効果」と呼んだ落とし穴がある。プラースは次のように警告する。「もとはといえば調査者が調査対象者の頭に吹きこんだ考えを、彼らを調査して『発見した』と思いこむ、といったことがないように注意しなくてはならない」（Plath1980,井上・杉野目訳p47）。更にプラースは「研究者効果」を完全に排除することは不可能であることをつけ加えている。

ショウとスタンレーの関係においては、スタンレーの方にショウの仮説に合うよう応答する動機付けが働いていたとしても不思議ではない。第一次調査においては、スタンレーがインタビュー調査と施設での処遇を有利にする見込みとを結びつけて考えていたかもしれない。そして第二次調査においては、スタンレーが社会生活を新たに築く上で、実質上ショウはなくてはならぬ存在であった。桜井はショウが自伝の著者であるスタンレーの将来を左右するほどの影響力を持つほどであったのに、そのことに無頓着であったと批判する（桜井1993,p98）。

ショウは彼自身の方向付けや統制に無自覚であったのだろうか。確かにラングネス＆フランクは、ライフヒストリーを収集することも含め、フィールドワークがきわめて複雑でむずかしい共同制作的な企てであるにもかかわらず、共同制作的という重要な事実が最近までむしろ無視されてきたと述べている（Langness & Frank1981,米山・小林訳p42）。だがライスは当時既に、インタビュー調査によって得られたデータには調査者の先入観が入り込む余地があることを指摘している（Rice1931）し、またバージェス（Burgess1931,pp241-244）も、インタビュー状況や調査者と調査対象者の関係の類型を8つ紹介し、それぞれの類型によって、資料に及ぼす影響がいかに異なるかを論じ、次のように述べている。「どんな記録を評価する場合にも、その記録が得られた特定の状況や関係をとらえることが肝要である」。

ショウがスタンレーのown storyを得た特定の関係やスタンレーが調査に応じた動機についての詳しい情報を読者に提供していないことは、批判されるべきであろう。彼は公的矯正者の立場にあったことさえ触れていない。ショウはむしろ彼自身の「研究者効果」に気づいていたのではなかろうか。

2 倫理上の疑問

スタンレーの追跡調査を行ったスノドグラスは、スタンレーが『ジャック・ローラー』出版直後に生涯最大の罪を犯していたことを明らかにしている（Snodgrass1983,p452-458）。恐慌の影響を受けてスタンレーは職を失う一方、妻が就職し、彼は主夫に甘んじなくてはならなかった。家族を食べさせることができない劣等感を、ギャンブルと酒で紛らしていたが、とうとうスポーツ用

品店に強盗に入ってしまう。スタンレーは店主の抵抗に合い、敢えなく途中で気力を失い犯行は未遂に終わったが、警察に逮捕され、シカゴの矯正施設に送られた。

スノドグラスは大恐慌の影響はあるにせよ、スタンレーが調査終了とともに意味ある他者を失ったことが再犯の原因の一つであるとする。スタンレーにとってショウが存在し、規則的に治療の効果を認め、心を通わせて気持ちを打ち明けることが必要であったのに、ショウは彼自身がスタンレーの更生に最も重要であったことを見逃していたと言う。なるほどバーガー＆ルックマンも、＜オルターネーション＞後の新しい主観的現実が維持されるのは、新しい意味ある他者との不断の会話によってであるとしている（Barger & Luckmann1966,p146）。

以上のことから、ショウが調査の終了とともにスタンレーとの交流を断ったこと(注7)は、倫理上問題ではなかったかという疑問が生ずる。この倫理上の疑問は、スタンレーの事例研究が矯正実践を含んでいたことから生じている。

・おわりに

これまで『ジャック・ローラー』は、特に生活史を入手する手法や、生活史を他の資料によって実証しようとした点が注目されてきた。イーストホープは生活史資料の使用におけるショウの厳密さを評価し、「彼の生活史の使用は、今でもその方法の規範となっている」とする（Easthope1974,川合他訳p122）。また水野も『ジャック・ローラー』で採用されている方法が、生活史法の精緻化という観点からみて技法の展開可能性を示唆していると評価し、他の資料を用いるショウの方法が、デンツィンがいう「三角測量的手法」の具体例とみなすことができるとしている（水野1986,p155-156）。

他の資料によって実証しようとした点が評価されたのは、検証不可能な単一の個人の口述にもっぱら頼っているという批判が、ライフヒストリー研究に伝統的になされてきた（Langness & Frank1981,米山・小林訳p43）ためであろう。だがこの多角的調査を行なっている点については、既に見たように、初期シカゴ学派の黄金時代の代表的モノグラフに共通する特徴であった。

その一方で他の代表的モノグラフにはない特徴、すなわち『ジャック・ローラー』が非行原因についての仮説を検証しているという点はこれまで見逃されてきた。調査対象者が一人に限られていることや、調査対象者が調査に応じた動機などについての情報を提供していないことなど、確かに限界はある。しかし提示した仮説を個人記録で裏付けるだけでなく、実験的に仮説を検証している点に注目すれば、初期シカゴ学派そして質的調査になされてきた次のような批判は『ジャック・ローラー』にはあたらないのではなかろうか。「シカゴ学派は生のデータを報告するが、そのデータの分析は低いレベルにとどまっている」（Douglas1976,p42）、「多くの質的調査は次の点で批判されてきた。単に記述的であるだけで、＜なぜか＞という疑問に答えていない」（Woods1992, p382）。

本論文では、生活史研究の新しい可能性を開示した『ジャック・ローラー』の生活史法を検討した。そこで新たに与えられる課題は、その手法を批判的に応用し、個人の主観的世界から個人と社会の関係を追究する方法を開拓してゆくことである。

<注>

(注1) ジャック・ローラーとは、酒に酔った者を狙って金品を盗む者のことである。

(注2) ここでは第一世代をスモール、トマスら、第二世代をパーク、バージェスら、第三世代をショウらとしておく。

(注3) トマスが社会改良に傾倒していたという見方もある。これについてはディーガン&バーガー (1981) を参照のこと。

(注4) ベネットによれば、これはショウの造語ではなく、ヒーリーのものである (Bennett1981,p184)。

(注5)『ジャック・ローラー』には少年が16歳の時とあるだけで、スタンレー少年の生年月日はどこにも書かれていないが、スノドグラスの調査 (1983) により、スタンレーの生年月日は1907年10月1日であることがわかっている。

(注6) <オルターネーション>=alternationに、村山は「態度変更」、山口は「翻身」の訳語をそれぞれあてている。

(注7) スノドグラスによれば、スタンレーの再犯が契機となり、スタンレーとショウは再会する (Snodgrass 1983,p454)。

<参考文献>

Barger, P.L.

1963 Invitation to Sociology：A Humanistic Perspective, Doubleday & Company, Inc.,1989 水野節夫・村上研一訳『社会学への招待』思索社

Barger, P.L.& Luckmann, T

1966 The Social Construction of Reality,1977 山口節郎訳 『日常世界の構成』新曜社

Bennett, James

1981 Oral History and Delinquency, University of Chicago Press

Bulmer, Martin

1981 Quantification and Chicago Social Science in the 1920s：A Neglected Tradition. Journal of the History of the Behavioral Sciences 17(1981):312-331

1984 The Chicago School of Sociology. University of Chicago Press

Burgess, Ernest W.

1931 Discussion. Clifford R. Shaw The Natural History of Delinquent Career University of Chicago Press pp233-254

Cressey, P. Goalby

1927頃→1983 A COMPARISON OF THE ROLES OF THE "SOCIOLOGICAL STRANGER" AND THE "ANONYMOUS STRANGER" IN FIELD RESEARCH URBAN LIFE Vol.12 No.1

Deegan, M. Jo & Burger, S. John

1981 W.I.Thomas and Social Reform:His Work and Writings. Journal of the History of the Behavioral Sciences 17(1981):114-125

Douglas, Jack D.

1976 Investigating Social Research. Sage

Easthope, Gary

1974 A History of Social Researth Methods, London,Longman Group Limited,1982 川合隆男・霜野寿亮監訳 『社会調査方法論』 慶應通信

Faris, Robert.E.L.

1967 Chicago Sociology : 1920-32. Chandler Publishing Company, 1990 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』

船津衛

1991「パークとシカゴ学派社会学」『東北大学文学部研究年報』40号

Harvey, Lee
1987 Myths of the Chicago School of Sociology Avebury
宝月誠
1990「逸脱者のキャリア分析―『ジャック・ローラー』の解釈の試み」『逸脱論の研究― レイベリング論から社会的相互作用論へ』 恒星社厚生閣PP178-PP223
Langness, L.L. & Frank, G
1981 Lives:an anthoropological approach to biograaphy. Chandler & Sharp Publishers,Inc.1993 米山俊直・小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門』 ミネルヴァ書房
Marcus, George E & Fischer, Michael M.J.
1986 ANTHROPOLOGY AS CULTURAL CRITIQUE. University of Chicago Press, 1989 永渕康之訳『文化人類学叢書　文化批判としての人類学』紀伊国屋書店
水野節夫
1986「生活史研究とその多様な展開」宮島喬（編）『ライブラリ社会学10 社会学の歴史的展開』 サイエンス社
中野正大
1997「社会調査から見た初期シカゴ学派」『シカゴ社会学の研究―初期モノグラフを読む―』恒星社厚生閣 pp3-37
Plath, David W
1980 LONG ENGAGEMENTS. the Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University 1985 井上俊・杉野目康子訳『日本人の生き方』　岩波書店
Platt, Jennifer
1994 The Chicago School and firsthand data. History of the Human Sciences Vol.7 No1　pp.57-80
Rice, S.A.
1931 "Hypotheses and Verifications in Clifford R.Shaw's Studies of Juvenile Delinquency" Rice, S.A.(ed.), Methods in Social Science, University of Chicago Press
桜井厚
1993「方法論としての生活史」松平誠・中嶌邦編著『講座生活学 生活史』光生館
Shaw, Clifford R.
1926 "CASE STUDY METHOD." Proceeding of the American Sociological Society21
1929 Delinquency and Social Situation Religious Education 24
1930→1966 The Jack-Roller : A Delinquent Boy's Own Story. University of Chicago Press
1931 The Natural History of a Delinquent Career. University of Chicago Press.
Shaw, Clifford R. (with the assistance of Henry D. Mckay and James F.McDonald;with special chapters by Harold B. Hanson and Ernest W. Burgess.)
1938 Brothers in Crime.University of Chicago Press
Snodgrass, Jon.
1972 The American Criminological Tradition.Ph.D.diss., University of Pennsylvania
1983 THE JACK-ROLLER A Fifty-Year Follow-Up.URBAN LIFE Vol.11 No.4
寺岡伸悟
1997「タクシーダンスホールの魅力」『シカゴ社会学の研究―初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣PP407-433
Thomas, W.I. & Znaniecki
1918-20 The Polish Peasant in Europe and America,1983 桜井厚訳『生活史の社会学―ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民―』御茶ノ水書房
徳岡秀雄
1993『少年司法政策の社会学』 東京大学出版会
Woods, Peter
1992 Symbolic Interactionism：Theory and Method. The Handbook of Qualitative Research in Education. Academic Press

The life-history methods of "Jack-Roller"

Mariko TAMAI

This paper tries to reevaluate the life-history methods of C.Shaw's "Jack-Roller", which is one of the most famous monographs written in the era of early Chicago school of sociology. The research methods of this study, especially the way of collecting the data of life-history and the combined use of other various materials have been appreciated.

But when we pay attention not only to the description of his methodology, but also to the whole content of "Jack-Roller", the methodological features which have been little pointed out come out to the surface. This monograph consists of three parts, as follows,

1. The hypotheses of causes of juvenile delinquency were presented.
2. Those hypotheses were supported by the boy's life-history.
3. The reformation program based on some of those hypotheses was put into action and the process of reformation was delineated by the boy's life-history.

The important point of this methodological features is that in this life-history Shaw inspected his hypotheses of causes of delinquency by way of his plan to reform the jack-roller based on his hypotheses. Much qualitative research has been criticized for being restricted to description and not answering the "why question". But in the case of "Jack-Roller", the critique is not acceptable. In fact Shaw, as the researcher, presented new possibilities of life-history methods in "Jack-Roller".